

キャンプ研究

第16巻

2013年3月発行

Japan
Journal of
Camping
Study

Vol.16

Mar. 2013

National Camping Association of Japan

キャンプ研究第16巻PDFについて

本PDFの内容について、ページ単位での印刷は可能ですが、テキストおよび画像のコピーはできない設定となっておりますので、ご了承ください。転載等を希望される場合は、日本キャンプ協会にお問い合わせいただきますよう、よろしくおねがいいたします。

また、冊子の販売も行っておりますので、入手を希望される方は、日本キャンプ協会へお申し込みください。

お問い合わせ先：公益社団法人日本キャンプ協会
電話：03-3469-0217 メール：ncaj@camping.or.jp

キャンプ研究

第 16 卷 2013 年 3 月 10 日発行

目 次

研究論文

- キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性…………… 3
築山 泰典・石田 頼識・瀬尾賢一郎・高瀬 宏樹

実践報告

- 被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題…………… 15
清水 啓一・渡邊 仁・向後 佑香
自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果…………… 23
青木康太郎・粥川 道子
大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題－第 2 報－…………… 31
仁藤喜久子

資 料

- 「キャンプ研究」投稿規程…………… 37
「キャンプ研究」収録題目一覧…………… 40
日本キャンプ会議発表題目一覧…………… 43

編集後記

研究論文

キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

築山泰典（福岡大学）・石田頼識（福岡大学大学院）・瀬尾賢一郎（福岡大学）
高瀬宏樹（国立赤城青少年交流の家）

Yasunori TSUKIYAMA・Toshinori ISHIDA・Kenichiro SEO・Hiroki TAKASE

Examination of the relevance of the education effect exerted on the children who participated in the camp and parents' recognition/expectation

The purpose of this study was to use the questionnaire of the camp effect made by NCAJ in 2007, and to verify with recognition of the educational effect on a camp participants and parents.

As a result, the educational effect of this camp showed the low tendency. But, we divided into three groups from the total points of before the camping, efficacy was observed in the middle group.

After the camping, we researched by questionnaire to the parents of the camp participants, and divided into 3 groups from the total points. As a result of comparison with the 3 groups about the camping effect to participants, the lowest point group showed low camp effect.

We consider the camp effects in educational not only participants but also parents.

This result show that NCAJ questionnaire is available as which is possible to be used for participants and parents.

キーワード：組織キャンプ、NCAJ キャンプ効果測定用紙、保護者の効果認識

Keywords：Organized Camp, The questionnaire of the camp effect made by NCAJ, Effect recognition of parents

1. 諸言

平成 23 年 6 月に制定された「スポーツ基本法」では、キャンプ等の野外活動は、「第三章基本的施策」の「第一節スポーツの推進のための基礎的条件の整備等」において「第二十四条野外活動及びスポーツ・レクリエーション活動の普及奨励」として掲げられる現状にある¹⁾。しかし、キャンプに関わる私たちにとっては、活動や行事としてキャンプが普及奨励されてきた“過去”から、すでに明確な目的を持った、野外教育型のキャンプが実践されている“今日”に至っているとの認識が、「我が国におけるキャンプの現状」であると

言える²⁾。

学校教育現場でも、単なる行事としてのキャンプではなく、総合的な学習の時間の具体的手段として捉えられている³⁾。また、2008 年に文部科学省が開始した「青少年体験活動総合プラン」では、小学校で 1 週間程度の集団宿泊を伴う自然体験活動の実施を目指している³⁾。

この様な状況、公益社団法人日本キャンプ協会は、2007 年度文部科学省委託事業として「我が国のキャンプスタンダードの開発に関する調査研究」を実施し、2008 年 2 月には「キャンプのちから - 日本の青少年を育むキャンプがめざす姿と

は-)と題する報告書を発行した⁴⁾。

本調査研究を実施する際、ACA (American Camp Association) が2002年に作成した調査用紙を元に、NCAJ (National Camping Association of Japan) キャンプ効果測定用紙を開発した。この調査用紙は、キャンプに参加したキャンパーとその保護者両方に調査ができる様式であることが、その特徴の一つとして挙げることができる。キャンパーへ対しては、キャンプの前後及び終了1ヶ月後に、保護者へ対しては、キャンプ後に保護者が感じる「子どもの変化」と「キャンプへの要望」を調査することができる形態となっている。

しかし、本質問紙作成以降、本紙を活用した研究は、本プロジェクト実施時の全国調査を対象とし、キャンプ構成要素とその効果に関して検証した研究のみとの現状⁵⁾にあり、作成した調査用紙を十分活用している状況とは言えない。

また、キャンプの効果測定に関する研究の多くは、直接的な参加者のみを対象としたものが多く、保護者から見た観点に関する研究は、少ないと言える現状にある^{6), 7)}。

そこで今回、筆者が主催するキャンプに参加した児童とその保護者を対象に本調査を実施し、児童の変化と保護者の認識についての関連性を明らかにすることと、本調査用紙の具体的活用の在り方を提案することを主たる目的とする。

2. 対象及び方法

2.1. 対象者

2011年8月20日～23日の3泊4日の日程にてF大学エクステンションセンターが主催した「友遊アルパインキャンプ」に参加した児童43名(男児:24名、女:19名)である。

2.2. キャンプ概要

友遊キャンプは2009年から継続的に実施されているキャンプ事業であり、1年目は自然との関わりを重視した「ネイチャーキャンプ」、2年目は冒険的要素を重視した「アドベンチャーキャンプ」として実施してきた。このキャンプは野外教育を専門とする教員2名が担当し、野外教育・レクリエーションを専攻するスポーツ科学部3、4年次学生が参加児童に対してキャンプカウンセ

ラー等として直接指導に当たる形態となっている。また、この事業は、学生に対しては「キャンプII」の授業として開講し、1単位の認定を行っている。

2011年度は大分県九重町にあるF大学「くじゅうの杜キャンパス」キャンプ場を中心に、九重連山への遠征を中心とするプログラムで構成される内容であった(表1)。

このキャンプにおいて主となるプログラムは、2日目から3日目にかけて実施する法華院温泉山荘への遠征となる。この遠征は標高差450m、距離4.5kmの往路と、翌日の標高差200m距離7kmの復路によるものである。キャンプ期間中は、テント泊自炊を基本とするものの、遠征時は法華院温泉山荘での宿泊泊提供食にて実施する計画であった。そのため、初日はテント設営等のキャンプ生活環境の整備、2日目はイニシアティブゲームによる仲間づくりの後、遠征し「法華院温泉山荘」に宿泊、3日目に法華院からキャンプ場に戻り、夕食コンテスト及びキャンプファイヤー、4日目にはキャンプ場の撤収とクラフトといったプログラムであった。キャンプ期間中、夜には“ふりかえり”としての班別ミーティングを実施した。

表1 対象キャンプ実施計画

時刻	2011年度 F大学エクステンション講座 “友遊”アルパインキャンプ タイムスケジュール案			
	1日目(8月21日) 内容	2日目(8月22日) 内容	3日目(8月23日) 内容	4日目(8月24日) 内容
6:00		6:30起床	5:00起床 P4早朝登山 (鉢立峠→立中山)	6:30起床
7:00		朝の集い (チニスコーン) 朝食作り & 昼食お弁当作り	朝食	朝の集い 朝食作り キャンプサイト片付け
8:00		P5協力ゲーム (イニシアティブゲーム)	P7外未種駆除ワーク	P10クラフト 自然物を活用した おみやげ作り
9:00	集合・点呼			
10:00	バス出発		P8アルパインツアー(往) (法華院～長者原 →やまなみ荘)	
11:00		昼食 お弁当とミニボール (大曲～法華院へ)		昼食 (やまなみ荘食堂)
12:00	やまなみ荘着 閉校式 休憩・昼食	P4アルパインツアー(往) (大曲～法華院へ)		
13:00				
14:00	P1サイト作り サバイバルテクニク1 (ロープワーク)			
15:00	テント、タープ、かまど			
16:00	夕食作り (食材・装備配布、ナタの説明)	法華院到着 入浴	キャンプファイヤー説明 スタンツ 夕食作り	閉校式 14:00バス発
17:00		夕食		大学番 解散
18:00				
19:00	P2ナイトハイク 九州自然道、牧の戸経由 展望台 入浴	P9九重の自然を知る		
20:00	班の時間 (振り返り)	班の時間 (振り返り)	P8キャンプファイヤー 班の時間 (振り返り)	
21:00	21:30就寝	21:30就寝	21:30就寝	
22:00	カウンセラー ミーティング	カウンセラー ミーティング	カウンセラー ミーティング	
23:00				

しかし、キャンプ初日、その地域に竜巻注意報が発令されていたこともあり、テントで宿泊は実施せず、屋内での宿泊バーナーによる夕食づくりに変更する必要があった。また2日目午前中にテントサイト設営を実施したため、予定されていた仲間づくりゲームが実施できずに遠征に向かう等のプログラム変更があった。

指導体制は、1グループを5名～6名の男女異学年8グループの編成を行い、それぞれに男女1名ずつ2名の学生がキャンプカウンセラーとして直接指導に当たることとした。

2.3. 検査及び手続

日本キャンプ協会が作成したキャンプ効果測定用紙を、現地でのキャンプ開校式時 (Pre)、閉講式時 (Post) にその場で配布回答させ回収した。また、1ヶ月後 (1M) については、同年10月1日に実施したキャンプ報告会案内文郵送時に、保護者用測定用紙と一緒に郵送し、報告会開催時に回収することとした。また、報告会当日の欠席者は、後日郵送にて提出させることとした。

本調査用紙は、30項目に対し「まったくそう思わない」～「とてもそう思う」までの4件法で回答させるものである。この30項目は3項目ずつ10要素にまとめられ、「自尊心」、「自立心」、「探究心」、「思考・判断力」の4要素を“自分とのつながり”の領域、「リーダーシップ」、「友達づくり」、「集団適応力」、「友人関係」の4要素を“人とのつながり”の領域、そして、「環境への関心」、「精神性」の2要素を、“自然とのつながり”の領域と解釈するものである(資料1)。

保護者に対しては、同様の質問項目であるものの、「キャンプ後の変化」について問う形式のもの、前述した10要素を直接的に「キャンプに参加させることに対する期待」として問う質問か

ら構成されるものである(資料2)。

これら調査用紙から得られたデータに関して、分散分析及びScheffeの方法を用いて多重比較を行った。また、個別の平均値の比較においては、平均値の検定(T検定)を、関連性に関しては相関係数を用いた。

尚、この分析にはシミック株式会社 HALBAU (High Quality Analysis Libraries for Business and Academic Users) 7を用いた。この時、統計的有意水準は5%を用いるが、10%を有意傾向として解釈することとした。

3. 結果及び考察

3.1. 参加児童に関する調査

本キャンプ参加者のうち、3回の調査において欠損値等がなかった38名(男児:20名、女児:18名、回収率88.4%)を本研究の対象者とした。この時、参加者の基本属性として、学年構成は、小学3年生が12名(31.6%)、4年生が9名(23.7%)、5年生が9名(23.7%)、6年生が8名(21.1%)であった。また、本キャンプへの参加回数は、1回目が28名(73.7%)、2回目が6名(15.8%)、3回目が4名(10.5%)といった状況であった。

キャンプ実施前(Pre)、実施後(Post)、そして報告会実施時(1M)の3つの時期における、3領域及び合計得点の平均値及び標準偏差を比較したところ、全てにおいて有意な変化は認められなかった(表2)。この結果から、今回実施したキャンププログラムにおいて、十分な教育効果が果たされていない可能性が示されるものであった。悪天候の影響もあり、プログラム内容を大幅に変更した点等の影響があったものと考えられる。

次にキャンプ実施前に行った調査結果については、最低点68点で最高点は102点であり、5点

表2 時期別の平均値と標準偏差及び分散分析

	N	Pre		Post		1M		分散分析 F値
		M	SD	M	SD	M	SD	
自分	38	33.97	4.49	34.11	4.85	34.58	5.31	0.16 n.s.
他者	38	39.32	3.39	39.61	4.86	39.47	4.60	0.04 n.s.
自然	38	9.40	1.37	9.63	1.49	9.34	1.56	0.40 n.s.
合計	38	82.68	7.95	83.34	9.7	83.40	10.11	0.07 n.s.

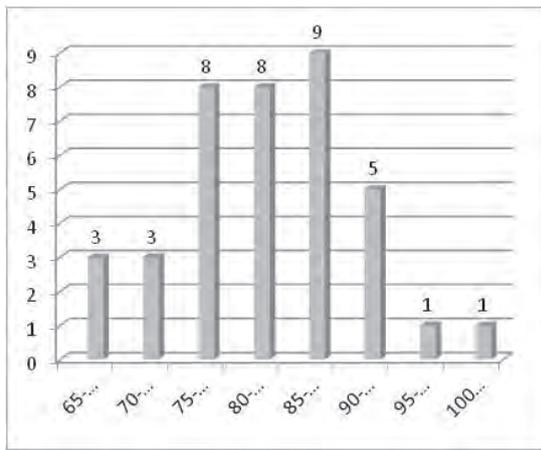


図1 キャンプ直前調査からの合計得点分布

刻みでその分布を示した(図1)。

ここで、全体の各1/3の人数を目安に同得点の区切り考慮し、低群・中群・高群の3群に分けることとした。この時、低群12名(L群)、中群14名(M群)、そして高群12名(H群)の3群に分けることができ、この3群別にキャンプ前後、そして1ヶ月後における3領域及び合計点の分散分析を行った。(表3)。

この時、キャンプ前に生じている“3群間の有意な相違”はキャンプ後及び終了1ヶ月まで解消されない結果が示された。しかし、事前と1ヶ月後とを群別の上昇数値(1M-Pre)を比較すると、L群に関しては“自分とのつながり1.58点”と“合計得点0.92点”において上昇傾向が示され、M群においては“自分とのつながり1.06点”、“他者とのつながり1.28点”、“自然とのつながり

り0.85点”、“合計得点3.14点”とそれぞれ数値の上昇が示された。特に、M群における合計得点3.14点の上昇について、個別に平均値の比較を行うと5%水準で有意な上昇が示された($t=2.71;p<.05$)。

このことから、キャンプ効果測定用紙にて測定された得点において3群に分けた時、特に「中群」とされる対象者において、本キャンプの教育的効果は認められるものの、他の低群及び高群においては、その影響が不十分である可能性が示唆される結果であった。荒天によるプログラムの変更は、キャンプを実施する際、安全面からも必要な事象である。プログラム変更後の、プログラムやキャンパーへの関わりをスタッフ全員で考慮する必要性が示されたものとする。

3.2. 保護者に関する調査

キャンプ後に保護者が感じた児童の変化に対する調査の結果を平均値(標準偏差)で示すと、自分とのつながり32.61点(4.63)、他者とのつながり35.87点(5.14)、自然とのつながり8.16(1.53)であり、合計得点は76.63(10.51)であった。またこの時、合計得点は最低点41点で最高点は105点であり、5点刻みでその分布を示した(図2)。キャンプ前に児童が示した合計得点の分布と比べて分布の広がりが認められる。

次にキャンプに対する期待に関する調査結果を平均値(標準偏差)で示すと、自分とのつながり13.82点(1.50)、他者とのつながり14.50点

表3 参加児童の3群別・時期別平均値と標準偏差及び分散分析の結果

	3群	N	Pre		Post		1M		分散分析(F値)		
			M	SD	M	SD	M	SD	時期	群別	交互作用
自分	L	12	29.50	2.91	30.08	5.32	31.08	4.62	***		
	M	14	34.01	2.53	34.50	2.88	35.07	3.32	0.24	33.15	0.31
	H	12	38.33	3.34	37.67	3.39	37.50	6.33			
他者	L	12	35.75	1.91	35.08	4.83	35.17	4.15	***		
	M	14	39.43	2.14	41.14	3.68	40.71	3.25	0.07	45.23	0.58
	H	12	42.75	1.96	42.33	3.00	42.33	3.53			
自然	L	12	8.33	0.89	8.50	1.24	8.25	1.29	***		
	M	14	9.36	1.08	9.86	1.23	10.21	1.25	0.56	20.12	2.03
	H	12	10.50	1.31	10.50	1.45	9.42	1.62			
合計	L	12	73.58	3.45	73.67	9.61	74.50	8.52	***		
	M	14	82.86	2.74	85.50	5.45	86.00	5.96	0.13	57.45	0.60
	H	12	91.58	4.54	90.50	8.82	89.25	10.30			

***: $p<.001$

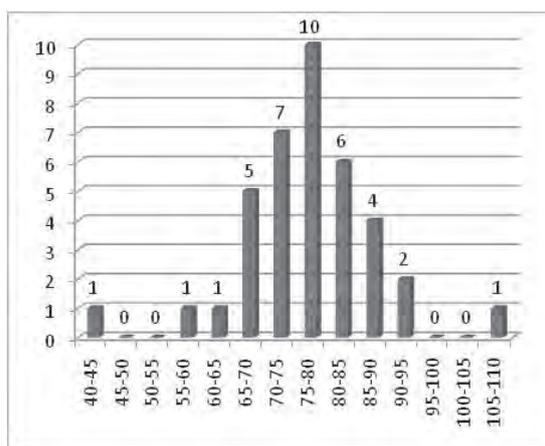


図2 保護者が感じた児童の変化合計得点分布

(1.54)、自然とのつながり 7.11 (0.94) であり、合計得点は 35.42 (3.37) を示した。期待に関しては項目数が 10 項目と、他の質問形式の 1/3 の項目数であるため、上限得点は 40 点となる。そのため、合計得点の 35.42 点は全ての回答で“4 点満点で 3 以上を記す結果”であり、保護者のキャンプに対する「高い教育的効果への期待感」が示されたものと考えられる。

そこで、これら参加児童の変化感とキャンプに対する期待感との相関を検証すると、“自分とのつながり”と“合計得点”において相関が認められる結果であった（自分： $R=0.45, t=3.04, p<.01$, 他者： $R=0.20, t=1.24, n.s.$, 環境： $R=0.098, t=2.39, n.s.$, 合計： $R=0.40, t=2.62, p<.05$ ）。このことは、相関が認められなかった“他者や自然とのつながり”に対しての、教育的効果を望む保護者の期待感に

沿えず、キャンプ後児童の変化・成長が感じられないとの“不満感につながっている可能性”があるものとする。全体としての合計点にて相関が認められる状況であり、全体としてキャンプに対する、不信感には至っていないと考えられるものの、保護者のニーズに配慮したキャンプ運営がより必要なものと考えられる。今後のキャンププログラム構成のために重要な資料となるものと考えられた。

3.3. 保護者の認識と児童の変化との関連

キャンプの保護者が感じた変化に関する調査結果から、全体の各 1/3 の人数を目安に同得点の区切りを考慮し、低群・中群・高群の 3 群に分け検証を進めることとした。この時、低群 10 名 (L 群)、中群 18 名 (M 群)、そして高群 10 名 (H 群) に分けることができ、それぞれの群別に参加児童の得点変化の比較検討を行った (表 4)。この時、“他者とのつながり”と“合計得点”に関して群間において有意な相違が認められた。多重比較においても、“他者とのつながり”において、L 群は M 群に対し有意な得点の低さが、H 群に対しても有意に低い傾向が示された。また、“合計得点”において、L 群は他の 2 群に比べ有意に低い傾向が示されていた。

合計得点からより平均値の比較を加えると、キャンプ実施前に示す得点及び標準偏差は、L 群が 80.40 (7.28) であるのに対し、M 群 83.00 (9.26) と H 群 84.40 (6.52) となり、L 群は

表 4 保護者の事後評価 3 群別・時期別平均値と標準偏差及び分散分析の結果

	3群	N	Pre		Post		IM		分散分析(F値)		
			M	SD	M	SD	M	SD	時期	群別	交互作用
自分	L	10	33.00	4.11	33.10	5.61	31.80	5.01	0.16	2.33	0.30
	M	18	33.94	5.34	34.22	5.43	35.33	5.61			
	H	10	35.00	3.50	34.90	3.21	36.00	4.76			
他者	L	10	38.10	3.28	37.70	5.79	37.10	3.45	0.04	3.60	0.15
	M	18	39.61	3.53	40.39	4.63	40.44	5.48			
	H	10	40.00	3.43	40.10	4.51	40.10	3.51			
自然	L	10	9.30	1.25	9.70	1.77	8.60	1.65	0.40	0.81	0.58
	M	18	9.44	1.46	9.72	1.53	9.72	1.60			
	H	10	9.40	1.51	9.40	1.35	9.40	1.35			
合計	L	10	80.40	7.28	80.50	11.75	77.50	6.88	0.07	3.16	0.32
	M	18	83.00	9.26	84.33	10.21	85.50	11.64			
	H	10	84.40	6.52	84.40	7.11	85.50	8.70			

*: $p<.05, +: p<.1$

他群と比較し数値的な低さを示すものの“有意な低さ”とまでは言えない（L-M間： $t=0.74;n.s.$ 、L-H間： $t=1.02;n.s.$ ）。しかし、キャンプ1ヶ月後までの推移を比較すると、L群はキャンプ後から1ヶ月後にかけて下降傾向を示すものの、他の2群は上昇傾向を示す（図3）。また、1ヶ月後の平均値を比較すると、L群に対しM群は有意な高さ（ $t=2.27;p<.05$ ）を、H群は有意に高い傾向（ $t=2.04;p<.1$ ）をそれぞれ示す結果であった。参加児童に対する3群に分けた比較においても、M群に教育的効果の可能性が示されたが、保護者に対する分類からも、同様の結果が示された。また、この時L群については、“キャンプ前から1ヶ月まで継続的に得点の低い状態”が保たれることは、大変興味深く感じられる。このことは、児童の成長にとって、日常的に関わる保護者の“その成長を育む目”としての「肯定的かつ敏感に解釈する態度の必要性」が示されたものと考えられる。

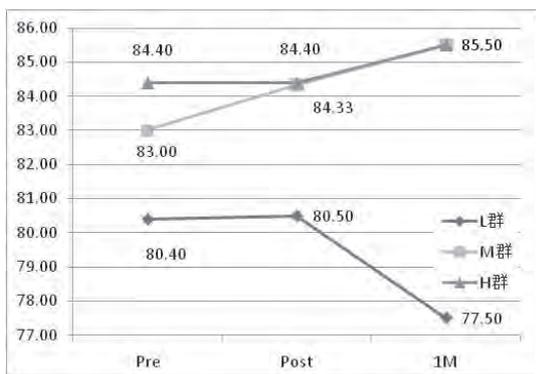


図3 保護者3群別 参加児童合計得点推移

実際、キャンプ実施前における児童の合計得点からの3群分布と、保護者の合計得点からの3群分布を合わせて比較すると必ずしも一致しているとは言えない状況である結果が示される（図4）。キャンプを通じて、その教育効果を高め、終了後まで継続させ、「日常生活でも定着」させるためには、キャンプ実施前後に開催される、事前説明会や報告会を活用し、“児童の成長を育む目”の必要性を、保護者へ伝えることの必要性を示唆する結果と考えられる。

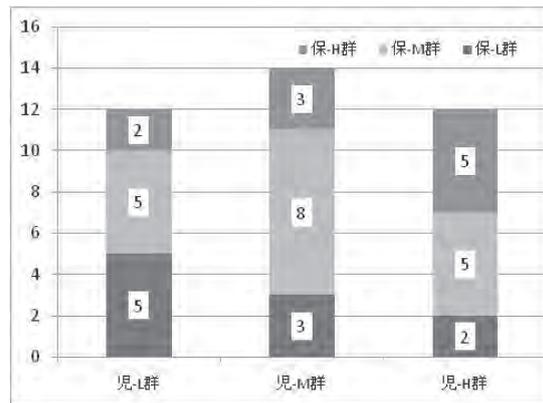


図4 児童3群別保護者評価3群の人数

4. 結語

児童を対象とした、1泊2日の遠征をメインプログラムとする3泊4日のキャンプに対して、その教育効果と保護者の変化の認識及びキャンプへの期待に関して検証を行った結果、

- 1) 今回調査対象としたキャンプでは、教育効果を明示するようなデータを得ることはできなかった。
 - 2) キャンプの事前調査における合計得点から低・中・高の3群に分けて検証した結果、中群において教育的効果の可能性が示された。
 - 3) キャンプ後に実施した保護者を対象とした調査結果の合計点から、児童と同様に3群に分けて検証を加えた結果、低群に属する児童の結果に全ての時期での低さが示された。
 - 4) また、キャンプ後から1ヶ月後にかけての変化に関して、低群のみ著しい下降を示すことから、キャンプ前後の保護者を対象とした説明会及び報告会開催時に、保護者への働きかけの重要性が示される結果であった。
- 以上、4点の知見を得るに至った。

実施するキャンプの効果測定を行う際、参加者である“キャンパー”やその場に関わる“指導者”を調査の対象とした研究が中心に行われている。しかし、キャンプに求められる教育的効果は、キャンプ期間中だけでなく、その後の日常生活における定着においてより重きが置かれる。日常生活における、保護者の認識及び関わりによって、その効果が変化する可能性が示されたことは、今後保護者も研究対象とすることの必要性が示されたものと解釈できる。

この点からは、本研究で用いた NCAJ キャンプ効果測定用紙は、有効な調査用紙といえる。今後、改訂を加えることも検証しながら、日本キャンプ協会の一財産として有効に活用する施策及び手段を検証する必要性を感じるに至った。

引用文献

- 1) 文部科学省、スポーツ基本法、平成 23 年 6 月 24 日法律第 78 号
- 2) 日本キャンプ協会 (2010) キャンプディレクター養成テキスト キャンプディレクター必携、pp.1-3
- 3) 自然体験活動研究会編 (小森伸一責任編集) (2011)、野外教育入門シリーズ 1 野外教育の理論と実践、杏林書院、pp161-171
- 4) 平野吉直他 (2008)、キャンプのちから - 日本の青少年を育むキャンプがめざす姿とは -、日本キャンプ協会
- 5) 岡村泰斗・平野吉直・高瀬宏樹・多田聡・甲斐知彦・築山泰典・永吉英記・林綾子・山田亮・岡田成弘 (2012)、キャンプの構成要素が青少年に対するキャンプ効果に及ぼす影響、野外教育研究、第 15 巻 1 号、pp45-54
- 6) 山田亮 (2004)、組織キャンプにおけるベネフィット・セグメンテーションの検討、北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要、第 7 号、pp59-69
- 7) 相奈良律・永松昌樹・横山誠・松林寛 (2009)、子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識 - 不満足評価の視点に着目して -、キャンプ研究、第 12 巻 3 号、pp3-8

資料1 NCAJ キャンプ効果測定用紙(参加児童用)

キャンパー用(キャンプ直前)

キャンプ参加者調査

名前	小 年 性別 男・女	日付	月 日	事業コード
----	------------	----	-----	-------

次の文をよく読み、自分のことについて、「まったくそう思わない」ときは1に、「あまりそう思わない」ときは2に、「すこし思う」ときは3に、「とても思う」ときは4に○をつけてください。これはテストではありませんので、正しい答えやまちがった答えはありません。思ったとおりに答えてください。

	まったくそ う思わない	あまりそ う思わない	すこしそ う思 う	とて もそ う思 う
<例> ごはんをのこさずに食べる	1	2	3	4
1. 自分にはしょうらいよいことがおこると思う	1	2	3	4
2. 何かするときに親のたすけが必要だ	1	2	3	4
3. 自分はよいリーダーだと思う	1	2	3	4
4. あまり知らない友だちに話しかけるのが好きだ	1	2	3	4
5. 友だちができるか心配だ	1	2	3	4
6. 友だちとわたしは仲良くやっている	1	2	3	4
7. 何か新しいことにちょうせんしたい	1	2	3	4
8. 自分たちの住んでいるちきゅうを大切にすべきだ	1	2	3	4
9. ルールを守ってものごとを考える	1	2	3	4
10. 神様を身近に感じられる	1	2	3	4
11. 自分にはよい人生がまっていると思う	1	2	3	4
12. 自分のことは自分でできる	1	2	3	4
13. まわりの友だちから自分がリーダーにえらばれると思う	1	2	3	4
14. 新しい友だちと遊ぶのが好きだ	1	2	3	4
15. 新しい友だちをつくるのはむずかしい	1	2	3	4
16. まわりの友だちは自分といると楽しいと思う	1	2	3	4
17. 何か新しいことをするのが好きだ	1	2	3	4
18. 自然にきょうみがある	1	2	3	4
19. 何か決めるときに、次に何がおこるか考える	1	2	3	4
20. 教会や神社、お寺に行くことが好きだ	1	2	3	4
21. 自分は大切な人だと思う	1	2	3	4
22. 親が近くにいないてもだいじょうぶだ	1	2	3	4
23. まわりの友だちは自分のことを大切にしていると思う	1	2	3	4
24. 新しい友だちに自分のことをよく話す	1	2	3	4
25. 新しい友だちとずっと仲良くするのはむずかしい	1	2	3	4
26. 他の人と仲良くやっていける	1	2	3	4
27. 何か新しいぼうけんをはじめたい	1	2	3	4
28. ゴミをリサイクルすることは大切だ	1	2	3	4
29. 他の人のいけんは自分とちがっていても大切だ	1	2	3	4
30. 自然の中で神様をよりみぢかに感じられる	1	2	3	4

資料2 NCAJ キャンプ効果測定用紙(保護者用)

保護者用(キャンプ1ヶ月後)

キャンプ効果測定用紙

参加者氏名:	参加者学年: 小 年生 参加者	月 日	事業コード*
性別: 男・女	参加者との関係:		

質問1. キャンプに参加したお子さまのキャンプ後の変化について、キャンプ前と比べてどのような違いがありましたか。以下の文章をよく読み、「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」まで、あてはまるところに○をつけてください。これはテストではありませんので、正しい答えやまちがった答えはありません。思ったとおりに答えてください。

	まったくそ う思わない	あまりそう 思わない	すこしそ う思う	とてもそ う思う
<例> 家の手伝いをする事ができるようになった	1	2	3	4
1. 自分の将来について肯定的に考えるようになった	1	2	3	4
2. 何かするときに親の助けを必要とするようになった	1	2	3	4
3. リーダーシップがとれるようになった	1	2	3	4
4. 知らない友だちに話しかけるようになった	1	2	3	4
5. 友だちができるか心配するようになった	1	2	3	4
6. 友だちと仲良くするようになった	1	2	3	4
7. 何か新しいことに挑戦するようになった	1	2	3	4
8. 地球の環境を気にするようになった	1	2	3	4
9. ルールを守ってものごとを考えるようになった	1	2	3	4
10. 神様の存在を意識するようになった	1	2	3	4
11. 自分の人生についてポジティブに考えるようになった	1	2	3	4
12. 自分のことは自分でできるようになった	1	2	3	4
13. まわりの友だちからリーダーに選ばれるようになった	1	2	3	4
14. 新しい友だちと遊ぶようになった	1	2	3	4
15. 新しい友だちをつくるのが苦手になった	1	2	3	4
16. 友だちからしたわれるようになった	1	2	3	4
17. 何か新しいことをするのが好きになった	1	2	3	4
18. 自然に興味を持つようになった	1	2	3	4
19. 何か決めるときに、次に何がおこるか考えるようになった	1	2	3	4
20. 教会や神社、お寺に興味をもつようになった	1	2	3	4
21. 自分自身のことを肯定的に考えるようになった	1	2	3	4
22. 親が近くにいないでも心配しなくなった	1	2	3	4
23. まわりの友だちから大切にされるようになった	1	2	3	4
24. 新しい友だちに自分のことを話すようになった	1	2	3	4
25. 新しい友だちと友人関係を続けるのが苦手になった	1	2	3	4
26. 他の人と仲良くするようになった	1	2	3	4
27. 何か新しい冒険を始めるようになった	1	2	3	4
28. ゴミを分別したりリサイクルしたりするようになった	1	2	3	4
29. 考えが違う人の意見にも耳を傾けるようになった	1	2	3	4
30. 自然の中で神様をより身近に感じられるようになった	1	2	3	4

質問2. その他にお子さまのキャンプ後の変化について気がついたことがあればお書き下さい。

質問3. 今後お子さまをもう一度キャンプに参加させるときに、どのようなことを期待して参加させますか。以下の項目をよく読み、「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」まで、あてはまるところに○をつけてください。

	まったくそ う思わない	あまりそう 思わない	すこしそ う思う	とてもそ う思う
<例> 家の手伝いをする事ができるようになってほしい	1	2	3	4
1. 自分を大切な人間だと思えるようになってほしい	1	2	3	4
2. 人に頼らずに自分の力で解決することができるようになってほしい	1	2	3	4
3. 中心に立って集団をまとめることができるようになってほしい	1	2	3	4
4. 新しい友達をつくることができるようになってほしい	1	2	3	4
5. 集団に適応することができるようになってほしい	1	2	3	4
6. 友人関係を維持することができるようになってほしい	1	2	3	4
7. 新しいものごとに好奇心をもち挑戦できるようになってほしい	1	2	3	4
8. 自然・環境に対する興味・関心をもつことができるようになってほ	1	2	3	4
9. ものごとを正しく分析し、判断することができるようになってほし	1	2	3	4
10. 自然や神様を感謝・尊敬することができるようになってほしい	1	2	3	4

質問4. その他にお子さまをキャンプに参加させるときに期待することを お書き下さい。

実践報告

実践報告

被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題

清水啓一（筑波大学大学院）・渡邊 仁（筑波大学）・向後佑香（筑波大学）

Keiichi SHIMIZU ・ Hitoshi WATANABE ・ Yuka KOGO

キーワード：キャンプ、震災復興支援、事業評価、生きる力

1. はじめに

東日本大震災発生以降、東北地方に住む子どもたちは、放射線の影響で屋外活動が制限され、運動不足や体力低下などの問題が指摘されている。また、このような環境で子育てをする保護者の間にも、不安感や精神的なストレスが生まれている。こうした背景を踏まえ、震災復興支援活動の一環として、各種団体等が様々な取り組みを行っている。

本実践は、被災地域の子どもたちを対象に行ったキャンプに関するものである。筆者は今回事例として取り上げるキャンプに関して、プログラムディレクターとして、その計画から実施に携わった。なお本報告は、前半は実践内容（概要、活動内容等）、後半は調査内容（目的、方法、結果、考察等）について整理し、今後の活動改善のための示唆を得た。

2. 実践内容

2.1. キャンプの概要

（主催・目的）

本事業は、茨城県つくば市にある野外教育団体「TOEL (Tsukuba Outdoor Education Lab.)」が主催し、事業名は「発見！冒険！大自然！！南会津アドベンチャーキャンプ」であった。事業の目的は、「南会津の豊かな自然の中で、仲間と楽し

く活動し生活を共にすることで、自立性や責任感そして仲間と協力することを身につける」とした。これは、被災地域において、放射線の影響なども含め子どもたちの外遊び環境が失われている現状を踏まえ、安全かつ豊かな自然環境の中で、仲間とともに思い切り楽しんでほしいという願いを込め設定した。

（期間・場所）

キャンプは、4泊5日（平成24年7月30日（月）～8月3日（金））の日程で行った。場所は、福島県南会津郡南会津町針生駒戸山「みどりの広場」及びその周辺で行った。

（対象・指導者・参加費）

対象は、茨城県・福島県・宮城県・岩手県に在住で、全日程に参加できる小学4～6年生（定員35名）とし、対象地域にある任意の小学校及び児童館に募集要項等を直接送付した。実際の参加者は、小学4年生14名、5年生4名、6年生4名の計22名（男子11名、女子11名）であった。班編成は、男女混合で6人班2つ、5人班2つで構成した。また、キャンプディレクター及びマネジメントディレクターに大学教員2名、野外教育を専門に学ぶ大学生8名がスタッフとして指導に当たった。なお、参加費は被災地復興支

援のために 5,000 円（内訳は「食事代」「保険代」「プログラム費」という低価格に設定し、人件費などは助成金（独立行政法人青少年教育振興機構「ゆめ基金」）で補われた。

2.2. 活動の詳細

表 1 にプログラム内容を示す。

(キャンプ生活)

ベースキャンプ地の「みどりの広場」には、屋根つき常設かまど、管理棟、トイレ（2か所）の設備があり、収容可能人数は 60～80 名程度である。また、入浴設備はないため、2 日目の沢登りと 3 日目の登山のあとは、周辺のホテルと温泉施設で入浴することとなった。また、テントサイトから 50m 程離れた広場の中央にある東屋を集会所とし、朝のつどいや登山説明を行った。食

事については基本的に野外炊事による自炊を主としたが、プログラムの時間的な制約上、要所で本部スタッフが調理したものを各班に提供した。

スタッフの待機場所は、活動中は東屋、就寝時は管理棟内もしくは参加者のテントサイト付近に建てたスタッフ用テントであった。

キャンプ生活中の参加者の様子として、就寝前や食事中など比較的自由な時間の中で、震災当時の記憶を語りだす子どもたちが見られ、十分な配慮を行った。普段の学校生活を離れ、初めて出会う仲間と心を許し、それぞれに抱える思いが自然と語られていく様子はとても印象的であった。

(初日の活動)

キャンプ初日は、キャンプ場の最寄り駅に集合し、その場で保護者合同の出発式を行ったあと、バスでキャンプ場へ移動した。開村式のあと、班

表 1 プログラム内容

	7月30日(月)	7月31日(火)	8月1日(水)	8月2日(木)	8月3日(金)
5:00		起床 朝食作り	起床 朝食	起床 朝食作り	起床 朝食作り
7:00					
9:00		仲 沢間 作 遊り ゲ び ム	七ヶ岳登山	個人別活動	後片付け
11:00	11:00集合 会津田島駅 移動(バス)				閉村式 キャンプ場出発
13:00	昼食(持参) 開村式	昼食	昼食	昼食	13:00解散 会津田島駅
15:00	アイスブレイク 設備				
17:00	夕食作り	入浴 夕食作り	入浴 夕食	自由時間 夕食作り キャンプファイヤー	
19:00	就寝	登山の 説明準備 就寝	就寝	就寝	
21:00					

ごとに周辺を散策し環境整備を行った。設営は10人用家型テント1張りと天幕を班ごとに建てた(写真1)。この日は初めての野外炊飯となるため、ナタの使い方や火の起こし方について実演しながら説明を行った。



写真1 設営

(沢遊び)

沢遊びは、キャンプ場から20～30分ほど歩いた距離にある水防を中心に行われた。水防に向かう道中にミッション(イニシアティブゲームの課題)を4か所設置し、カウンセラー引率の下、各班にグループワークが課せられた。水防に到着後、班ごとに弁当を食べ、しばらく自由時間とした。水防はダム状になっており、参加者はタイヤチューブや水中ゴーグルなどを使い、豊かな自然に触れ合う様子が見られた(写真2)。当日は極めて晴天であったが、下見の時点で当日も沢の水が冷たいことが予想されたため、焚火台に火を起こして暖をとれるようにした。



写真2 水防周辺

(登山)

本キャンプのメインプログラムは、七ヶ岳(標高1,635m)登山である。子どもたちには前日の登山説明の時に、「グループ登山」であることを強調し、仲間同士助け合いながら班全員で登山を成し遂げられるように動機づけを行った。登山コースは総距離約8.6km、標高差約700m、約7～8時間の行程であった。キャンプ場からマイクロバスで20分程の黒森沢コース登山口から、各班で準備運動を行い、準備の整った班から登山を開始した。

歩きはじめはカウンセラーが列の先頭を歩き、ペースが落ち着いたところで参加者が順に先頭を歩いた。本コースの見どころは登りの中盤にある護摩滝であるが、参加者の半数以上を占める小学4年生には少々難しい箇所もあり、スタッフが危険と思われる場所に立ち、安全に配慮しながら登った。山頂での昼食後、会津高原たかつえスキー場へと下るコースへ入り、スキー場に併設される温泉施設をゴールとした。



写真3 護摩滝

(個人別活動)

4日目は参加者が生活班を離れ、前夜に説明された興味のある各活動(鳴沼散策、焼き板作り、ネームタグ作り、パチンコ作り)に分かれて行った。

鳴沼散策班は、キャンプ場から車で20分程林道を進んだ場所にある鳴沼で活動を行った。ここは、森林に囲まれ、周辺に建造物もないため非常に静かな環境である。参加者は沼にボートを浮かべて遊んだり、足ヒレとスノーケルを使って水中鬼ごっこなどをして過ごした。

その他の参加者はネイチャークラフトプログラ

ムとして、「焼き板」「ネームタグ」「パチンコ」の3つに分かれて活動を行った。キャンプ場に落ちている木や枝、薪の中から適当な板を見つけるなどして、自然の素材を使って工作をしていた（写真4）。また猛暑の中ではあったが、熱中して取り組んでおり、出来る限り涼しい場所で、水分補給などにも配慮しながら穏やかな時間を過ごした。



写真4 ネイチャークラフト：ネームタグ

(キャンプファイヤー)

キャンプファイヤーでは各班ごとのスタンツ（寸劇）の時間を設けた。テーマは「キャンプの思い出」と設定し、夕食までの時間で各班練習を行うように指示した。どの班もキャンプで印象的だった場面が再現され、創意あふれる発表であった（写真5）。



写真5 キャンプファイヤー

2.3. 考察

プログラム全体をふりかえり、本キャンプは幸いにも4泊5日の間に天候が崩れることがなく、はじめに予定していたプログラムを変更すること

なく行うことができた。結果として天候に悩まされることはなかったが、今後南会津でキャンプを展開していくには、代替プログラムの充実をはかっていく必要を感じた。特に雨天時に決行の難しい沢遊びプログラムなどは、期待している参加者も多く、代案には工夫が必要であろう。また、最終日の撤収などについても、悪天候の場合に備え、一時的に備品を乾燥させるための退避場所などを十分に検討しておかなければならないと感じた。

登山では、コース中盤の護摩滝を慎重に登らせていたために渋滞が起こり、予定していた山頂到着時刻に間に合わない班も多かった。下りのスキー場を抜ける道についても、スタッフから「だらだらと長すぎるのでは」と指摘があった。登山についてはコースと行程について見直しの必要を感じた。具体的には、山頂から高杖方面ではなく、下岳側を下るコースを選択するという方法もあり、今後実地踏査を重ねて改善していきたい。

また、本キャンプでは、食材の入手、移動用バス、備品準備など、地元の方々に多大な協力を得た。このような貢献への感謝とともに、今後はプログラムの中に地域性を取り入れていくことが有意義と思われた。地元南会津をよく知る人々を指導者としてむかえ、参加者がこの地域と繋がってゆけるようなプログラムを提供していきたい。

3. 調査

3.1. 調査目的と方法

本事業を評価するために、自己評価（参加者）及び他者評価（保護者）として、「キャンプの事業評価」と「参加者の生きる力」を調査した。本調査は、質問紙法を採用し、キャンプの報告書と合わせて調査票を郵送し、記入後に返送してもらった。調査時期は、キャンプ終了2ヶ月後（平成24年10月）に実施し、10件の有効回答を得た。

「キャンプの事業評価」調査票

キャンプの事業評価については、他者評価として保護者に、自己評価として参加者に対して行った。他者評価（保護者）の内容は、9つの視点（情報媒体、満足度、参加費、期間、時期、資料の見やすさ、継続意向、その他要望）について調査を

行った。一方、自己評価（参加者）の内容は、7つの視点（楽しさ、仲間関係、友達作り、活動内容、継続意向、参加して良かった・学んだこと、その他要望）について調査を行った。

「参加者の生きる力」調査票

「生きる力」に関する調査は、橘直ら（2001）が作成した「IKR 評定用紙」（14 指標×5 項目＝70 項目）を基に、下位指標ごとに因子負荷量の大きい項目を2つずつ採用した（13 指標×2 項目＝26 項目）。なお、下位指標である「現実肯定」については本対象者に不適切と判断して除外した。各項目においては、「変化なし（わからない）」「多少なりとも変化を感じる」の2件法による名義尺度とした。

3.2. 結果と考察

3.2.1. キャンプの事業評価

キャンプの満足度については自己評価（参加者）、他者評価（保護者）共に概ね高い評価を受けた（表2、表3）。参加者の質問項目「南会津アドベンチャーキャンプで楽しかったことを3つ以内で挙げて下さい」では登山（滝登り含む）

と回答した参加者が最も多かった。これは、登山ルートの中に滝の中を登るといった印象的な難所があり、その体験が参加者の心に深く刻まれたことが推察された。また、次に回答の多かった沢遊びについては、プールのような人工的に作られた水辺環境とは違い、自然の沢で遊ぶということが新鮮に感じられたようである。当日の参加者の様子からも、このような非日常体験が減少傾向にあることが覗えた。

保護者への質問項目「配布資料についてはどうでしたか？」で「わかりにくかった」と回答した保護者から、キャンプ地や登山を行う山の詳細な情報を掲載してほしいとの要望があった。このような回答の他にも事前段階の情報周知に関する課題が残った。本事業参加者のほとんどは4泊5日のキャンプは初体験であり、保護者もまたキャンプの持ち物の準備などは不慣れであることを想定し、明瞭な配布資料の作成に当たる必要がある。また、参加費については、本実践のように、助成金などの補助を受けることで、良質な自然体験活動を安価で提供することができる。助成金の有効活用は、野外活動のもつ魅力を広く伝えていくための一助となるであろう。

表2 参加者「キャンプの事業評価」調査の結果

Q1. キャンプは楽しかったですか？	とても楽しかった	楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった		
	9	0	1	0		
Q2. 班の友達とは仲良くできましたか？	とても仲良くできた	仲良くできた	あまり仲良くできなかった	仲良くできなかった		
	6	4	0	0		
Q3. 新しい友達はできましたか？	たくさんできた	できた	あまりできなかった	できなかった		
	6	5	1	0		
Q4. キャンプで楽しかったことを3つ挙げて下さい	登山	沢遊び	キャンプファイ	野外炊事	個人別活動	テント生活
	9	7	3	3	2	2
Q5. 今後もこのキャンプがあったら参加したいですか？	はい	いいえ				
	8	1				
Q6. キャンプに参加して良かったこと、学んだこと、成長したと思うことがあれば書いてください	<ul style="list-style-type: none"> 初めての経験ばかりで大変だったけれど、自分の力になったと思う 普段できない滝登りや沢遊びができた 新しい友達が作れた 将来どのようにしたらいいのかわかると学べた 体が強くなったと思う 寝袋とテント生活が経験できた。 一人でもいろんなことが出来るようになった 初めて登山をしたこと 皆で協力して料理をしたこと 					
Q7. 感想・要望等	感想	<ul style="list-style-type: none"> 新しい友達もたくさんできたと、とても楽しい思い出がたくさんできて良かった とても楽しかったいい経験になった 5日間のキャンプでいろいろなことを体験できて良かったです つらかった。(体力的に) 				
	要望	<ul style="list-style-type: none"> トイレに虫がたくさんいたのでもう少しよくしてほしいです 冬にスキーなどをしてほしい 毎日お風呂に入りたかったです 冬にもキャンプがあったらいい 				

表3 保護者「キャンプの事業評価」調査の結果

		チラシ	福島県HP	文科省HP	ロコミ	その他
Q1.本キャンプはどのようなメディアで知りましたか？		8	1	0	1	0
Q2.本キャンプの満足度はどうでしたか？		非常に満足 6	満足 4	あまり満足していない 0	満足していない 0	
Q3.本キャンプの値段設定はどうですか？		非常に安い 6	安い 4	適正 0	高い 0	非常に高い 0
Q4.開催期間(4泊5日)についてどうでしたか？		もっと長いほうがいい 3		4泊5日で良い 6		もっと短い方がいい 1
Q5.開催時期(7月30日～8月3日)についてどうでしたか？又、いつが適当ですか？		適当 7	7月後半 2	8月前半 1	8月中旬 0	8月後半 0
Q6.配布資料についてどうでしたか？		わかりやすかった 8		わかりにくかった 2		
Q7.今後もこのようなキャンプに お子様を参加させたいとお考えですか？		はい 9		いいえ 1		
Q7-2.その理由 (自由記述)	プログラムについて	<ul style="list-style-type: none"> ・自然に触れ合い、又、活動内容も充実しているため ・親だけで経験させられないダイナミックな体験の機会を与えていただいたので。 				
	参加者(子ども)の反応	<ul style="list-style-type: none"> ・本人がとても満足していたようなので ・とても成長して帰ってくるため ・子どもがまた参加したいと言っているから 				
	保護者の思い	<ul style="list-style-type: none"> ・短期間で友達を作り、協力すること、集団行動をさせたい ・いろいろな経験をたくさんしてほしいから ・協調性を育ませたい ・自立心を育てるため。自然の中で遊ぶことが出来るように。 				
Q8.その他要望等	プログラムについて	<ul style="list-style-type: none"> ・七ヶ岳登山がやはりきつかったと話していた。 ・キャンプ中の食事も、様々なメニューを作っていたのにびっくりしました。 ・今回のキャンプで得たものはたくさんあったと思います 				
	参加者(子ども)の反応	<ul style="list-style-type: none"> ・家に帰ってから、食事作りはずいぶん興味を持って手伝うようになりました。 				
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・根性がついたと思います ・保護者への事後報告(報告書等)丁寧にお知らせいただけて有り難かった ・キャンプ先等の写真、入浴するところのパンフレットなどがあるともう少し安心材料として、子どもへの心配が少なくなったかと思えます。 ・今後の生活にプラスになると思っています。 				

3.2.2. 「参加者の生きる力」

表4は、「生きる力」に関する調査の26項目のうち、「変化なし(わからない)」と回答した人数に対して「多少なりとも変化を感じる」との回答が4人以上あった項目をまとめたものである。その結果、キャンプを通して「自然への関心」「野外技能・生活」の2指標に関して、「多少なりとも変化を感じる」と感じた参加者と保護者が多かった。「自然への関心」については、子どもたちがキャンプ体験を通じて、自然がもつ美しさだけでなく、その多様性や陰しさを肌で感じたことが印象に残っているのではないだろうか。「野外技能・生活」については、先述した「キャンプの事業評価」調査の自由記述欄で、「家事の手伝いをするようになった」などの回答が見られたこともあり、キャンプ生活の中でチャレンジしたことが実生活の中で活かされているようである。また、「明朗性」「視

野・判断」の2指標については、保護者の多くが変化を感じているものの、当の参加者にはその自覚がなく、興味深い結果となった。

4. まとめ

本稿では、本年7月末に福島県南会津郡針生地区で行われたリフレッシュキャンプを事例に取り上げ、その活動と調査内容について報告した。事業を評価するに当たり、以下のような示唆が得られた。

- ・参加者募集の時期と方法についての見直しが必要である。具体的には、各都道府県の教育委員会を通じて、関係書類を配布するなどの方法をとる必要がある。
- ・本事業を行うに当たり、地元住民には特に準備段階で多大な協力を得た。このような連携を実際のプログラムに生かし、地域との結びつきを

表4 「参加者の生きる力」(自己評価、他者評価)の結果

下位尺度	項目	変化があった項目	
		自己評価(参加者)	他者評価(保護者)
非依存	いやなことは、いやとはっきり言える 小さな失敗をおそれない		
積極性	前向きに、物事を考えられる 自分のちからで、問題を解決しようとする		
明朗性	だれにでも話しかけることができる いつも笑顔で過ごしている		○ ○
交友・協調	グループをうまく、まとめることができる おとなや年上の人と、うまくつきあえる	○	
視野・判断	自分で問題点や課題を見つけることができる わからないことは自分で調べる		○ ○
適応行動	人の話をきちんと聞くことができる その場にふさわしい行動ができる	○	
自己規制	自分かってな、わがままを言わない 身のまわりの片づけや、そうじができる		
自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる 生きものを、とても大切にす	○ ○	○ ○
まじめ勤勉	していいこと、してはいけないことの判断ができる いやがらずに、よく働く	○	
思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ あいての立場になって考えることができる		
日常行動力	へやの中でなく、外であそぶのが好きである からだを動かしても、疲れにくい	○	
身体的耐性	すこしくらい血がでても平気である 暑さや寒さに、まけない	○ ○	○
野外技能・生活	自分で食事がつくれる ナイフなどの刃物を、上手に使える	○ ○	○ ○

より深めていくことが有意義である。

- ・本実践が行われた針生地区は、未開拓な部分が多く、様々なプログラム実施の可能性を秘めている。荒天時などの対応も含め、フィールドの理解を深めてプログラムを開発していく必要を感じた。
- ・キャンプ場及びその周辺の環境については、改修が必要な箇所(トイレ、周辺の林道など)があり、関係機関に働きかけることでよりよい環境作りを目指す必要性がある。
- ・本実践は震災復興支援活動として行われ、キャンプ生活の中では、子どもたちから当時はふりかえるような語りがあった。指導に当たるスタッフはこのような状況に対し、十分な配慮が必要である。子どもたちの語りに耳を傾け、同じ時間を共有するという姿勢で接していくことが重要である。

参考文献

- 1) 橋直隆 平野吉直 (2001) : 生きる力を構成する指標. 野外教育研究, 4 (2), 11 - 16

自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果

青木康太郎（北翔大学）、粥川道子（北翔大学）

Kotaro AOKI・Michiko KAYUKAWA

キーワード：高齢者、自然体験、健康増進、生活の質の向上

1. はじめに

戦後、我が国は、高度経済成長による生活水準の向上や医療技術の進歩、健康増進の機運の高まり等により世界有数の長寿国となった。その一方で、我が国の65歳以上の高齢者人口は2,975万人、総人口に占める割合が23.3%と過去最高となり¹⁾、世界でも類を見ない速さで高齢化が進行している。そのため、我が国では、「人生65年時代」を前提とした高齢者の捉え方を改め、働き方や社会参加、地域におけるコミュニティや生活環境の在り方、高齢期に向けた備え等を「人生90年時代」を前提としたものへとシフトさせ、豊かな人生を享受できる超高齢社会の実現を目指すことが求められている²⁾。

このように超高齢社会への対応が求められる今日、北翔大学、小樽商科大学大学院ビジネススクール、コープさっぽろ、赤平市の4者は、長寿社会における高齢者の社会的役割の再構築を視野に入れた新たなモデルづくりの試みとして、平成22年度から産学官連携の協同プロジェクト「あかびら・地域まるごと元気アッププログラム」（以下、「まる元プログラム」と言う。）に取り組んでいる³⁾。まる元プログラムでは、高齢者の機能向上・閉じこもり予防の実践プログラムを通して地域医療費・介護保険料の上昇を抑え、高齢者の「元気」による活動量の増加を経済効果につなげるこ

とを目的に、地域の高齢者を対象に運動教室や体力測定会、健康講演会等を行っている。

現在、筆者らは、「北海道型スポーツ振興システムの構築」（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）の研究活動の一環として有志の学生による研究会を設け、自然体験活動指導者の養成に取り組んでいる。養成した指導者は学内の実習等で指導するだけでなく、地域の青少年教育施設や青少年団体の主催事業、教育委員会のイベント等で指導や運営に携わり、指導力の向上に努めている。そこで、今回、自然体験活動の企画や運営等に関するトレーニングの一環として、まる元プログラムと連携し、自然体験をベースとした高齢者向けの健康増進プログラムの企画・運営に取り組んだ。

本報告は、まる元プログラムで行った自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の企画や実践の様子、その成果等について報告するものである。

2. プログラムの企画に当たって

笑いは体の免疫力を向上させると言われており、最近では笑いの健康効果が医学的に実証されつつあると言われている⁴⁾。笑顔はその人の幸せを表すだけでなく、周りの人も幸せな気持ちにさせる力があり、健康で豊かな人生を送るために

は、人と触れ合い、互いに笑いや笑顔を交える機会を持つことが大切だと言える。そのため、今回のプログラムでは、参加者全員で同じ活動を行いながら共に楽しみ、互いに笑顔を交わせるようなプログラムにしたいと考えた。

しかし、まる元プログラムの参加者の年齢は60歳代から80歳代までと幅広く、普段の運動教室では年齢や体力を考慮して3つのクラスに分けてプログラムを実施している。そのため、すべての参加者が一同に会し、運動プログラムを行うのは今回が初めてであった。そこで、今回のプログラムでは、年齢や体力にかかわらず誰でも取り組める運動としてウォーキングに着目し、自然の中で仲間と楽しみながらウォーキングができるようにウォークラリー形式でプログラムを実施することとした。

このように“年齢や体力にかかわらず、みんなで一緒にウォーキングを楽しみ、笑顔になる”ことを目指し、参加者やスタッフ全員でその思いを共有できるようプログラム名を「スマイル・ウォーク」と命名した。

3. スマイル・ウォークの目的

スマイル・ウォークでは、自然体験による高齢者の豊かな人生づくりの支援を行うため、ウォークラリーを通じた「健康増進 (Health Promotion)」と「生活の質の向上 (Quality of Life)」を目的とした(図1)。健康増進では、ウォークラリーを通じて仲間と一緒に楽しく体を動かしたり、運動後おいしい食事をとることで心身のリフレッシュを図ることをねらいとし、生活の質の向上では、ウォークラリーをきっかけに、家の外に出る、人や自然と交流する、何かに興味を持

つ、学びを深める機会を作ることをねらいとした。

なお、スマイル・ウォークでは、上記の目的やねらいを達成するために、ウォークラリーを通じて「運動する (Sports)」、「出会う (Meet)」、「興味を持つ (Interesting)」、「学ぶ (Learn)」、「楽しむ (Enjoy)」の5つの体験をすることが大切だと考えた。そのため、これら5つの体験をチェックポイントの企画のテーマとした。

4. スマイル・ウォークの概要

(1) 日時

平成24年10月14日(日)

10:00 ~ 13:30

(2) 場所

エルム高原リゾート「家族旅行村」

(3) 参加者

32名(男性5名、女性27名)

60歳代4名、70歳代22名、80歳代6名)

(4) スタッフ

赤平市職員5名、健康運動指導士2名、

北翔大学教員3名・学生17名

(5) 参加費

1,000円(弁当・飲み物代500円、

活動費400円、保険料50円、

消耗品50円)

(6) 主な内容

ウォークラリー、ネイチャークラフト

(しおりづくり)

(7) タイムスケジュール

10:00 参加者到着(バス)、ヘルス
チェック(血圧等)

10:10 開会式、オリエンテーション
(スケジュールの説明等)

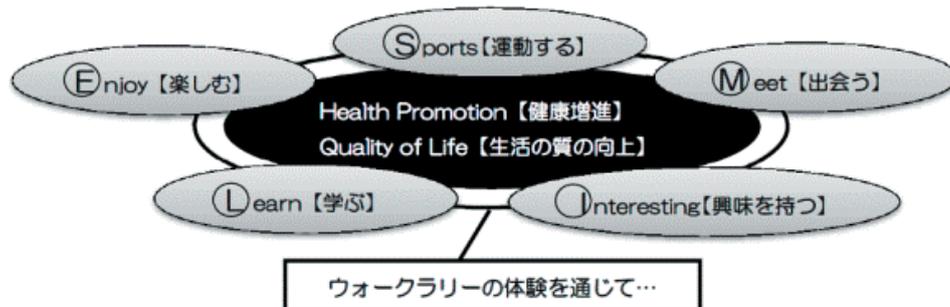


図1 「スマイル・ウォーク」のコンセプト

- 10:20 健康体操
- 10:30 グループ分け
- 10:35 スマイル・ウォークの説明
- 10:40 ウォーキング指導
- 11:00 スマイル・ウォーク開始
- 12:00 スマイル・ウォーク終了
昼食（弁当）、アンケート
- 13:00 閉会式、記念品贈呈
- 13:30 参加者出発（バス）

5. スマイル・ウォークの組織体制

スマイル・ウォークでは、プログラム全体の進行を教員と学生2名で担当し、その他は、グループ系（グループスタッフ、サポートスタッフ）、プログラム系（ウォーキング指導、健康体操、チェックポイント）、マネジメント系（記録、送迎・健康管理）の3つに分かれ、組織的な運営を行った（図2）。

なお、参加者のグループについては、スマイル・ウォークが楽しめるよう体力や健康状態、人間関係等を考慮して6つのグループに分けた。



写真1 ヘルスチェック



写真2 開会式

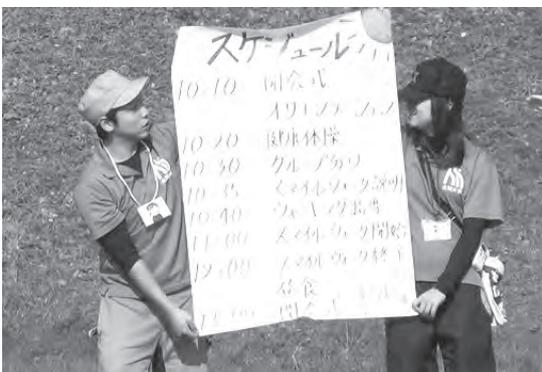


写真3 オリエンテーション



写真4 健康体操



写真5 ウォーキング指導



写真6 昼食

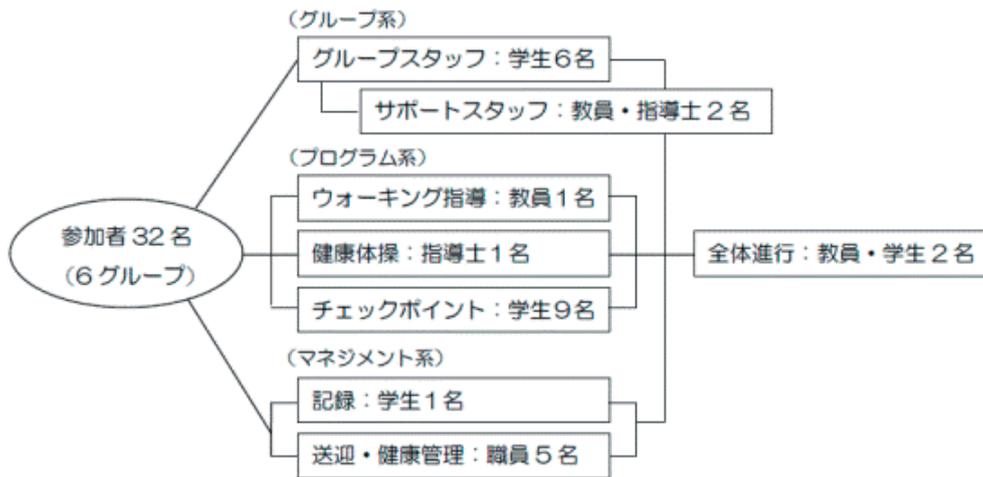


図2 スマイル・ウォークの組織体制

6. スマイル・ウォークのプログラム

(1) ウォークラリーのルール

スマイル・ウォークの時間は1時間とし、時間内に5つのチェックポイントを回り、各チェックポイントの得た点数の合計をグループで競い合うプログラムとした。チェックポイントを回る際、自分が気に入った落ち葉（名刺サイズ程度）を1枚拾ってくることにし、スマイル・ウォークの終了後、その落ち葉と引き換えに弁当が受け取れるルールにした。なお、拾ってきた落ち葉は、名札と一緒にパウチし、閉会式の際に記念品として贈呈した。

今回、プログラムを行ったエルム高原リゾート

「家族旅行村」は傾斜が多いキャンプ場であったため、高齢の参加者の体力を考慮し、歩く距離が長くないようチェックポイントを300～400mの範囲で設定した（図3）ただし、比較的体力のある参加者には、より一層ウォーキングが楽しめるようノルディックポールを準備し、ウォーキング指導（写真5）の際、ノルディックポールを使ったウォーキングについて講習を行った。

(2) チェックポイントについて

スマイル・ウォークのチェックポイントでは、「運動する (Sports)」、「出会う (Meet)」、「興味を持つ (Interesting)」、「学ぶ (Learn)」、「楽し

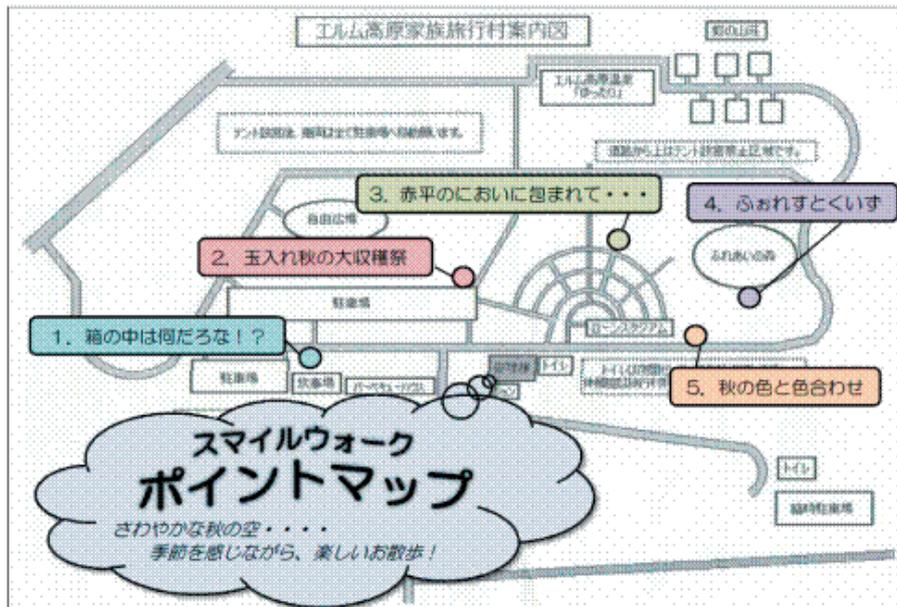


図3 スマイル・ウォークのポイントマップ

む (Enjoy)」といった体験ができるよう、それぞれのテーマに合わせて以下の活動を行った。

①「箱の中は何だろうな!？」楽しむ (Enjoy)

20点、30点、40点と書かれた3つの箱には周辺で拾ってきた自然物(石や松ぼっくり等)がひとつずつ入っており、箱の中に手を入れ、手の感触で中に入っている物を当てるゲーム(写真7)。チャレンジできる箱はひとつで、得点が高い箱ほど難易度も高くなっている。グループで話し合っテチャレンジする箱を決めたら一人ずつ箱に手を入れ、全員が触り終えたらグループで相談して答えを決める。正解すれば箱に書かれた点数が加算される。

このゲームでは、箱に入っている自然物の感触を楽しむだけではなく、グループのメンバーと相談して答えを決めることで人との交流を楽しむことをねらいとした。



写真7 箱の中は何だろうな!？

②「玉入れ秋の大収穫祭」運動する (Sports)

5点、10点、15点と書かれたカゴが置かれており、制限時間2分以内に一人一投で交代しながらカゴに玉を投げ入れ、入った玉の数だけカゴに書かれた点数が加算されるゲーム(写真8)。

このゲームでは、基本的運動動作として「投げる」動作を取り入れ、参加者の力やコントロールに合わせてゲームを楽しめるようにカゴの距離を複数設定した。投げるのが上手な人は遠くのカゴをねらい、苦手な人は近くのカゴをねらうなどグループで協力しながらゲームにチャレンジすることで、グループで高得点をねらう連帯感や体を動かす楽しさを味わってもらうことをねらいとした。



写真8 玉入れ秋の大収穫祭

③「赤平のにおいに包まれて・・・」出会う (Meet)

テーブルの上に5つの紙袋が置かれており、袋の中の匂いを嗅いでそれぞれ何の匂いか当てるゲーム(写真9)。匂いの種類は、ミント、レモン、ローズ、ヒノキ、ラベンダーの5種類となっており、1問正解するごとに20点が加算される。

このゲームでは、普段何気なく嗅いでいる自然の香りが何の匂いなのかを改めて考えることで、嗅覚から新たな自然との出会いを楽しむことをねらいとした。



写真9 赤平のにおいに包まれて

④「ふおれすとくいず」学ぶ (Learn)

赤平市にまつわる事柄を4択クイズにし、制限時間3分以内にグループで相談して答えを決めるゲーム(写真10)。クイズは全部で4問あり、1問正解で10点、2問正解で30点、3問正解で50点、4問正解だと100点が加算される。

Q 1. 赤平市の市名を意味するアイヌ語は？

(正解：アカピラ)

Q 2. 赤平市では何が盛んだったのか？

(正解：炭鉱)



写真 10 ふおれすとくいず

Q 3. キャンプ場に流れる川に生息している絶滅危惧種は？ (正解：オショロコマ)

Q 4. 赤平市の花は？ (正解：菊)

このゲームでは、長年住んでいる赤平市のことについて新たな発見をしてもらうことで、学ぶことの楽しさを味わってもらうことをねらいとした。

⑤「秋の色と色合わせ」興味を持つ (Interesting)

袋の中から3枚の折り紙を引き、引いた折り紙と同じ色の落ち葉を拾ってくるゲーム (写真 11)。折り紙と同じ色の落ち葉を拾ってこられたら、その色の折り紙の裏に書いてある点数(10点、20点、30点)が加算される。

このゲームでは、普段は気にもしたことがない落ち葉の色に注目してもらうことで、秋の紅葉を感じてもらったり、秋の自然に興味を持ってもらうことをねらいとした。



写真 11 秋の色と色合わせ

7. アンケートの結果

Q 1. 今日のイベントについて、あなたはどのように感じましたか。(〇はひとつ)

1. 良かった (100%)

- 2. まあまあ良かった (0.0%)
- 3. あまり良くなかった (0.0%)
- 4. 良くなかった (0.0%)

Q 1で「1」又は「2」を選んだ人のみ

Q 2. 「良かった」、「まあまあ良かった」と回答した理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 1. 体を動かすことができたから (93.8%)
- 2. 心身のリフレッシュになったから (90.6%)
- 3. 自然を感じることができたから (90.6%)
- 4. 新しいことを学んだり、体験する機会になったから (87.5%)
- 5. 若い人と交流できたから (87.5%)
- 6. 普段話をしたことがない人と交流できたから (84.4%)
- 7. 友だちと交流を深められたから (81.3%)
- 8. 普段より食事がおいしく感じたから (75.0%)
- 9. 今の生活の充実につながったから (68.8%)
- 10. 外出する良い機会になったから (65.6%)
- 11. その他 (12.5%)

(自由記述) クイズで頭の体操ができた。

赤平のことについて分からないこともあったので。

芝生の上を歩くことができたから。

Q 3. このようなイベントがあったらまた参加したいと思いますか。(〇はひとつ)

- 1. 参加したい (100%)
- 2. できれば参加したい (0.0%)
- 3. あまり参加したくない (0.0%)
- 4. 参加しない (0.0%)

Q 3で「1」又は「2」を選んだ人のみ

Q 4. 次回のイベントでは、どのような活動を行いたいですか。(〇はいくつでも)

- 1. 体を動かす活動 (93.8%)
- 2. 自然を感じる活動 (84.1%)
- 3. 人と交流する活動 (78.1%)
- 4. 野外料理 (46.9%)
- 5. 創作的な活動 (クラフトや絵画等) (34.4%)
- 6. 文化的な活動 (歌や踊り等) (34.4%)
- 7. その他 (0.0%)

Q 5. 今日のイベントの時間の長さはどうでしたか。(○はひとつ)

1. 今日ぐらいの時間がちょうどいい (75.0%)
2. 時間を長くしてほしい(夕方まで) (12.5%)
3. 泊りがけでやってほしい(1泊等) (9.4%)
4. 時間を短くしてほしい(午前中まで) (0.0%)

Q 6. 今日のイベントの参加費(1,000円)はどうでしたか。(○はひとつ)

1. 高い (0.0%)
2. 少し高い (0.0%)
3. ふつう (75.0%)
4. 少し安い (0.0%)
5. 安い (25.0%)

8. 最後に

天気予報では雨の予報であったが、当日は運よく天気が回復し、10月の北海道にしてはとても暖かい陽気の中でプログラムを実施することができた。キャンプの成否は自然と人(参加者・スタッフ)に大きく影響されるが、今回のスマイル・ウォークは人にも自然にも恵まれたプログラムであった。

翌週に行われた運動教室では、スマイル・ウォークの話題で持ちきりとなり、「次はいつ?」、「またやってほしい」といった声が聞かれた。アンケート結果を見ても、参加者の約9割が「体を動かすことができた」、「心身のリフレッシュになった」、「自然を感じる事ができた」、「新しいことを学んだり、体験する機会になった」、「若い人と交流できた」と感じていたことから、スマイル・ウォークの目的やねらいはおおよそ達成されたと考えている。しかし何より、みんなと一緒にウォーキングを楽しみ、笑顔になっている参加者の姿がスマイル・ウォークの大きな成果を表していたと言えるであろう。

今回のプログラムは、自然体験活動指導者を志す学生のトレーニングとしての一環として行ったが、学生はプログラムの企画や運営、ゲームの指導だけではなく、参加者との温かい交流を通して多くの学びを得ることができたと考える。今後は、ここで得た学びや経験を生かして更なる指導

力の向上を図り、さまざまな地域でスマイル・ウォークを展開していきたいと考えている。

謝辞

本プログラムの実施に当たっては、赤平市介護健康推進課長 齊藤幸英氏、赤平市地域包括支援センター長 永川ひとみ氏をはじめ、赤平市職員の方々に多大なる御協力を賜り、プログラムの指導に当たっては小坂井留美先生(北翔大学)、本多理沙先生(札幌リゾート&スポーツ専門学校)、小川裕美先生(健康運動指導士)、プログラムの企画・運営に当たっては上田知行先生(北翔大学)に御指導・御助言を賜りました。そして、たくさんの笑顔を見せてくれた参加者の皆様に対し、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

注記

「スマイル・ウォーク」は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北海道型スポーツ振興システムの構築」(平成23年～平成25年、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター)における健康スポーツ研究分野(自然体験活動グループ)の研究活動の一環として行ったものである。この研究成果は、次年度に予定している「地域や学校等との連携事業」の基礎資料とする。

参考・引用文献

- 1) 内閣府(2012)平成24年版高齢社会白書、内閣府、p2
- 2) 高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会(2012)高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会報告書～尊厳ある自立と支え合いを目指して～
- 3) 北翔大学(2013)あかびら・地域まるごと元気アッププログラム、北翔大学ホームページ、北翔大学、<http://www.hokusho-u.ac.jp/renkei/akabiraprogram-f/>、2013年1月9日参照
- 4) 沢井製薬(2013)“笑い”がもたらす健康効果、健康かけいぼ、沢井製薬、<http://www.sawai.co.jp/kenko-kakeibo/topics/vol08.html>、2013年1月9日参照

大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題—第2報—

仁藤喜久子（東京都キャンプ協会）

Kikuko NITO

キーワード：大学生・野外活動・人間関係の構築・レクリエーション技術

1. はじめに

東京福祉大学では、全学部（社会福祉学部・心理学部・教育学部・短期大学部）の新入生約1,000名を対象に、群馬県前橋市富士見町赤城山にある本学研修センターを利用して2泊3日の宿泊研修を実施している。この活動は、開学以来、伊勢崎キャンパス及び池袋キャンパスの学校行事として毎年継続して実施している。（表1. 実施概要、

表2. 活動内容）

本研究は、平成22年度に実施（キャンプ研究第15巻にて報告）した活動内容を見直し、平成23年7月2日～22日に実施をした池袋キャンパス548名の学生の取り組みについて報告するとともに、質問紙調査の結果をもとに次年度の改善に資することを目的とする。

表1 実施概要

東京福祉大学赤城山宿泊研修 概要

- 目的：①集団宿泊研修を通して教職員と学生、学生相互の人間関係を構築する。
②野外活動の体験を通して、レクリエーション指導者に必要な知識・技能を習得する。
- 日程：2泊3日（平成23年6月6日～7月22日の期間16団編成で実施）
- 場所：群馬県前橋市富士見町赤城山
東京福祉大学研修センター（収容人数約100名）
- 対象：全学部新入生（社会福祉学部 / 心理学部 / 教育学部 / 短期大学部）
伊勢崎キャンパス及び池袋キャンパス在籍 約1,000名

表2 平成23年度 池袋キャンパス活動内容

<p>1 日目</p> <p>AM 集合 / 大学出発 / 研修センター到着 昼食</p> <p>PM 開校式 アカデミックアドバイザーとの集い レクリエーション活動①（学生スタッフ主催） *野外炊事（バーベキュー） *グループ活動①（スタンツ練習） 入浴 / リーダー会議 / 消灯</p>
--

<p>2 日目</p> <p>AM 朝の集い（ラジオ体操） / 朝食 / 清掃 ハイキングへ出発</p> <p>PM 昼食 ハイキングから到着 *グループ活動②（スタンツ練習） 夕食 キャンプファイヤー（*スタンツ発表を含む） 入浴 / リーダー会議 / 消灯</p>
--

<p>3 日目</p> <p>AM 朝の集い（ラジオ体操） / 朝食 / 清掃 手紙書き レクリエーション活動②（学生スタッフ主催） 昼食</p> <p>PM 閉校式 / 研修センター出発 / 大学到着 解散</p>
--

*平成23年度新たに導入した活動

学生スタッフ：宿泊研修（野外活動）は全て教員が指導をするのではなく、昨年参加した2年生の中から「学生スタッフ」（教職員をサポートする学生）の希望者を募り、自らがレクリエーションの内容を検討し、1年生に仲間作りゲーム・歌・ダンスやキャンプファイヤーを指導する方法を実施している。1回の宿泊研修に60～80名の新生が参加し、参加人数に応じて6～8名の学生スタッフが参加する。（写真1. 写真2）



写真1 学生スタッフ（スタンツの様子）



写真2 学生スタッフ（ラジオ体操の様子）

2. 研究方法

2.1. 調査対象者と調査時期

本調査は、東京福祉大学（池袋キャンパス）1年生548名を対象に、2泊3日のプログラム最終日（平成23年7月2日～22日）に質問紙調査を実施した。回収率は100%である。

2.2. 調査方法

質問紙調査法（記述式・複数回答可）

2.3. 質問項目

- Q1. 所属
- Q2. 目的①人間関係の構築について
- Q3. 目的②レクリエーション技術の習得について
- Q4. 楽しかったこと
- Q5. つらかったこと
- Q6. 学んだこと
- Q7. 今回の活動で初めて体験したこと

3. 結果と考察

Q1. 所属について

教育学部：150名、社会福祉学部：社会福祉専攻159名/精神保健専攻32名、保育児童学科：120名、心理学部：86名の参加者から有効回答を得た。

Q2. 目的①「集団宿泊研修を通して教職員と学生、学生相互の人間関係を構築する」について

「できた」と「まあまあできた」を合計すると98%であることから、宿泊研修（野外活動）を通して教職員と学生、学生相互の人間関係を構築することができたと言える。

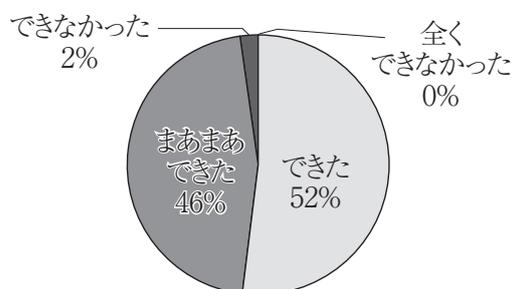


図1 人間関係の構築

Q3. 目的②「野外活動の体験を通して、レクリエーション指導者に必要な知識・技能を習得する」について

「できた」と「まあまあできた」を合計すると97%であることから、野外活動の体験を通してレクリエーション指導に必要な知識・技能を身に必要知識を習得したと言える。

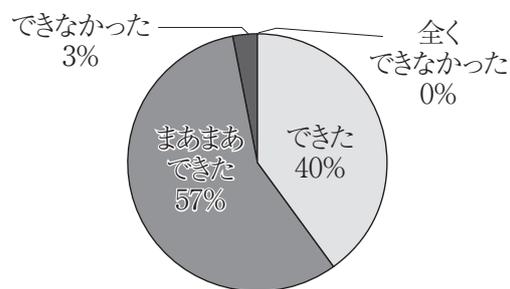


図2 レクリエーション技術の習得

Q4. 楽しかったことについて

「キャンプファイヤー」40%が一番多く、「友達や先輩との交流」18%、「野外炊事」10%、「グループ活動（スタンツ）」9%と回答が続くことから、クラスやグループでの交流が楽しかった活動であったと言える。

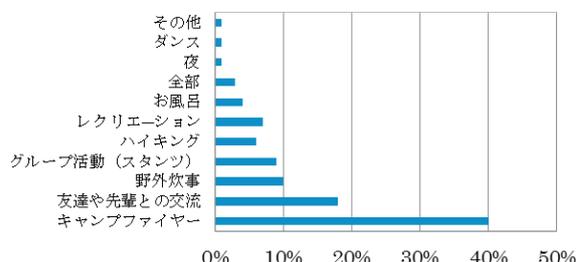


図3 楽しかったこと

Q5. つらかったことについて

「ハイキング」が多く44%の回答であった、日頃の身体活動量が少ないことから、体力がなく「疲れた=つらい」経験になったのではないと言える。

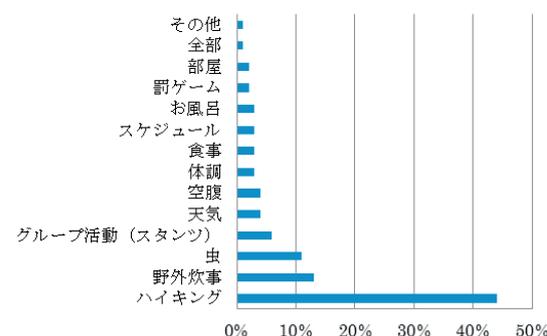


図4 つらかったこと

Q6. 学んだことについて

「人間関係」28%、「努力すること」27%、「集団行動」25%の3項目合計の回答から、クラスやグループ活動を通して、福祉・保育・教育業界で必要とされる資質が学べる機会があったのではないと思われる。

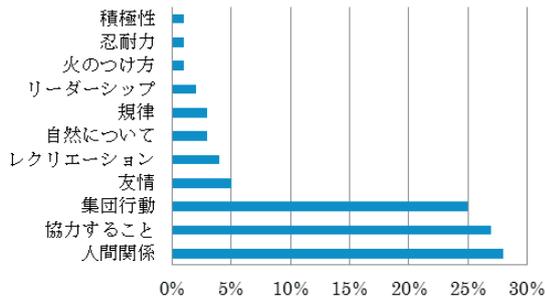


図5 学んだこと

Q7. 今回の活動で初めて体験したことについて

図6に示すとおり、今回の活動で初めて体験したことが「ある」38%、「ない」62%の回答であることから、6割以上の学生が青少年期に体験している。しかし、小・中学校などの宿泊研修（野外活動）等で体験しておらず、大学で初めて経験した学生も約4割おり、「キャンプファイヤー」24%、「スタンプ」19%、「ハイキング」12%、「キャンドルサービス」11%、「野外炊事」9%、「ダンス」7%、「火おこし」6%、「レクリエーション」5%の回答があった。

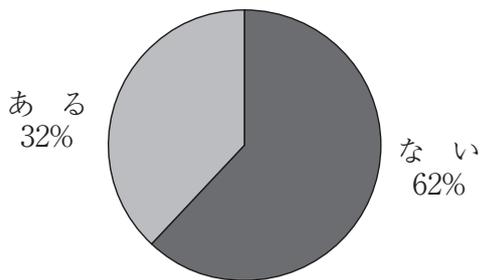


図6 初めての体験

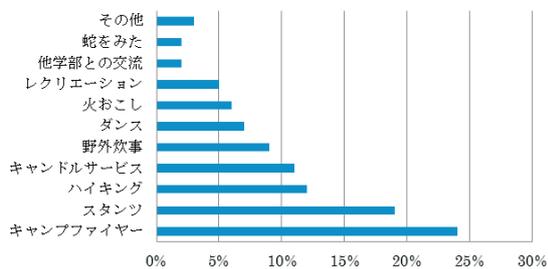


図7 初めての体験 (ある)

4. まとめ

平成22年度の報告（キャンプ研究第15巻）において、学生から「野外炊事をやってみたい」との回答があり、平成23年度のプログラムに導入した。野外にてバーベキューをすることで、役割分担を決めて行動することや普段交流がない仲間とコミュニケーションを取りながら食事をする経験は、より深く人間関係を深める機会となった。また、キャンプファイヤーの中でグループでのスタンプ発表を導入することで、仲間と協力することや集団行動を学んでいる。

以上のことから、将来、福祉・保育・教育業界に就職を希望する学生にとって、大学における宿泊研修（野外活動）は大変重要で意義深い経験であると言える。

今後の課題は「安全教育」である。いつ起こるか分からない災害、都会暮らしの中で水道・ガス・電気・交通が使用できなくなったらどう対応したら良いか、自分自身の身をどのように守るか、野外での生活を経験させることで「生きる力」を身に付けさせたいと考える。

引用・参考文献

- 仁藤喜久子（2012）大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題、キャンプ研究、第15巻、31-35

資料

公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12項以内（1項1,600字以内）、実践報告は8項以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200語以上300語以内）とキーワード（5語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

(記載例)

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者 2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の 4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - A: そのまま掲載可能
 - B: 一部修正すれば掲載可能
 - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
 - D: 掲載不可
 - 3) 2 名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記 3) に当てはまらない場合のみ、2 名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき 3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、調査・安全委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60 日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計 3 部（オリジナル 1 部、コピー 2 部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに 5,000 円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する
[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分及び影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学ぶの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウスリフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾～新しいコンセプトを持ったシルバークャンプのこころみ～
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンバク大学の幼児キャンプ ●“共有”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉YMCA LD児等キャンプ～つばさグループキャンプ～
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ～馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討～ ●人と人つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鶯敷キャンプ場 川内学童クラブ 鶯敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発～港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み～ ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効果 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ―事業中止から学ぶこと― ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山 YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入した ASE が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ 2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ 2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第 10 巻第 3 号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 -第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き - AOCF 創立 - ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究 - 花山キャンプを事例として - ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ - 10 年の軌跡 -

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして - 野外活動を通して気づくこと -

[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究 - 身体障害者模擬患者を通して - ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある

[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から -

[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響

[報告] ●第 11 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) -

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 -第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について - メイン州、キャンプ・オーアトカの場合 - ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟「雪のスゴイ! を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008」 ●ぱるぱるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の (小学 - 大学) 男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発 - プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して - ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告 - 他団体との連携と運営のポイントに着目して - ●『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト - 余島プロジェクト - ●「読書」による観想的キャンプ生活 - 中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して -

[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - キャンプが青少年の成長に及ぼす効果 - ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - プログラムと自然・生活環境に着目して - ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - 参加者と指導者に着目して -

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識 - 不満足評価の視点に着目して -

[報告] ●キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第 12 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) -

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 -第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割 - 米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム - ●病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプを - 医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み - ●休止スキー場を活用したキャンプの試み - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から - ●

指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～ ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者をめざす女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクセスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号(2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(安全管理編)～

■第14巻第1号(2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALTプログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership 参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカントリースキーを求めるとか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について [ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号(2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後には生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻(2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネットワーク～

◆ CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議(1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸-東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議(1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について(2)

[報告の部] ●ACAアメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS冒険を通しての体験学習 ●子ども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議(1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の葉の森の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える(Ⅱ)～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議(2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議(2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営—YMCAプロジェクト・SEEDのケース— ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議(2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み—ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプとする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告—アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議(2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Campにおける子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿(10泊11日)”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第 8 回日本キャンプ会議 (2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集める CAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第 27 回ウィンタースクール実践報告

■ Camp Meeting in Japan 2005 –第 9 回日本キャンプ会議 (2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第 12 回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習 夏! 君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成 (映像発表) ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動 (私の体験) ●OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟 (ACF) の創立

■第 15 回 Camp Meeting in Japan 2011 (2011/9/22 ~ 25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第 15 回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立 45 周年記念 第 20 回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■ Camp Meeting in Japan 2012 –第 16 回日本キャンプ会議 (2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[特別講演] ●「グリーン (ワーク) × キャンプ」にできること

[口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での 21 日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンパー子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その 1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者 8,000 人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その 1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その 1 ●大学生の宿泊研修 (野外活動) の現状と課題 (第 2 報)

[ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果 (3) – 4 ヶ年調査結果の分析 – ●東日本大震災被災地でのグリーンキャンプの実施報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その 2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その 2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その 2

※ Camp Meeting in Japan 2006 –第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 –第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』(毎巻第 1 号)として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

・『キャンプ研究』 各 1,000 円 (税・送料込み)

・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,000 円 (税・送料込み)

※第 1 回～第 5 回日本キャンプ会議抄録集の在庫はなくなりました。

※『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号の在庫はなくなりました。

編集後記

今回のキャンプ研究第16巻では、研究論文が1題、実践報告が3題掲載されています。

築山さんたちの研究は、日本キャンプ協会の調査プロジェクトで開発した調査用紙を用いた研究で、キャンプに参加した子どもたちのキャンプ前後の変化や、子どもたちの保護者の意識変化との関係について分析したものです。この時の調査では、キャンプの教育的な効果を明示するデータが得られなかったようですが、その原因として、竜巻注意報などの悪天候による急なプログラム変更の影響も大きかったのではないかと述べられています。

清水さんたちの報告は、震災復興支援活動の一環として行ったキャンプの実践報告です。キャンプの内容はもとより、その時行った研究の結果についても触れられていて、研究論文的な内容の濃い報告となっています。このキャンプは、おそらく、整備された施設やエリアなどが最初はほとんど何もなかった状態から一歩を踏み出したキャンプなのでしょう。読んでいて、今後、このキャンプを取り巻く地域の人たちとの関わりや新たなプログラム開発などをどのように展開していくのか、そちらへの興味と期待も大きく湧いてくる内容でした。

青木さんたちの実践報告は、若い学生さんたちを指導者に育て上げていく内容の報告です。普段から、課程認定校としてキャンプインストラクターを養成している筆者たちが、産学官連携の共同プロジェクトと連携して、また、若い学生のためのトレーニングとして、高齢者のための健康増進プログラムを主体的に実施した報告です。60歳代～80歳代までの幅広い高齢者へのウォーキングプログラム提供が、高齢者のための生きがい作りに繋がることや若い人たちがその活動指導を通じてさまざまな学びを得ていることが伺えます。

仁藤さんの報告はキャンプ研究第15巻の続報とも言える内容で、今回も大学生が2泊3日の学内行事として行われる野外活動やレクリエーションを指導していく実践報告です。野外活動などの経験が少ない大学生を相手に、同じくまだ指導経験が浅い先輩たちが、後輩をどのように指導していったかの事例とアンケート結果が報告されています。毎年行われる事業などをさまざまな視点から評価していくことはとても大事なことであると思います。

今回、投稿されました方々に感謝いたしますと共に、読者の皆さまには、個々の実践を記録にまとめ、その報告をキャンプ研究にご投稿いただければと思います。

編集担当理事 星野敏男

キャンプ研究

第16巻

2013年3月10日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局
発行所 公益社団法人日本キャンプ協会
NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



NCAJ
National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
TEL 03-3469-0217
FAX 03-3469-0504
E-mail ncaj@camping.or.jp

© 公益社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

人と自然との調和を目指す
私たちはオガワテクノです

株式会社オガワテクノ

<http://www.ogawa-techno.jp>

東京支店	〒135-0031	東京都江東区佐賀1-5-4 アーバン佐賀ビル4階	TEL 03-3641-7123
本社・江刺工場	〒023-1131	岩手県奥州市江刺区愛宕字西下川原240-1	TEL 0197-35-4161
胆沢工場	〒023-0402	岩手県奥州市胆沢区小山字中油地137	TEL 0197-47-1496

ISBN978-4-904008-07-2
C9075 ¥953E



9784904008072



1929075009536

キャンプ研究

第16巻
2013年3月発行

▲研究論文

キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

築山 泰典・石田 頼識・瀬尾 賢一郎・高瀬 宏樹

▲実践報告

被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題

清水 啓一・渡邊 仁・向後 佑香

自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果

青木 康太郎・粥川 道子

大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題－第2報－

仁藤 喜久子



NCAJ

National Camping Association of Japan

公益社団法人日本キャンプ協会

定価 1,000円(本体953円)